

マーガレット・アトウッドの軌跡  
ーカナダの文化的自立からグローバルな環境問題へー

長崎大学大学院生産科学研究科  
松田 雅子

1961年に詩集『ダブル・ペルセポネ』を出版し、作家としてスタートを切ったアトウッドは、1985年の長編小説『侍女の物語』で国際的な評価を確立する。その後現在までに、カナダを代表する作家として成長を遂げ、作家・詩人・批評家として多大な業績を積み重ねていった。カナダ文学のキーワードを「サバイバル」ととらえ、女性・移民・労働者の立場から創作を重ねていった。その後、文学者の社会的使命を意識するアトウッドは、カナダの文化的自立を達成した方法を地球環境問題に応用し、「環境と文学」というテーマで、現代文明批評と人類のサバイバルを考察する作品を著わしている。

本論文では代表的作品である5つの長編小説を選び、評論集『サバイバル』と『負債と報い』と共に分析を試みた。アトウッドは、文学作品の分析によって精神的な地図を描き、そうすることでカナダ的なアイデンティティ探究の達成に貢献することができた。その後、グローバル資本主義や地球環境問題を展望していくときに、そのやり方を応用し、現代社会の分析にその力を存分に発揮している。本論文は、このようなアトウッドの作家としての軌跡を辿ろうとする試みである。

アトウッドの長編小説『侍女の物語』『キャッツ・アイ』『またの名をグレイス』『昏き目の暗殺者』『オリクスとクレイク』を通じてのテーマとして、本論では「カナダ女性のアイデンティティ探究」と「現代文明批評」の2点を取り上げた。カナダを舞台にした作品で、移民国家カナダの歴史が明らかにされる。労働によって自立し、独立をめざす考え方がカナダ社会の女性の生き方の根底にあることを示し、また、家父長的な社会で分断されがちな女性同士の関係が改善されなければならないという方向性も示されている。

また、若き日にラドクリフ女子大に留学していたアトウッドは、1980年代のアメリカのキリスト教原理主義の台頭に危機感を感じ、宗教的独裁へと移行しかねない政治的風潮に対し、警告の意味を込めて『侍女の物語』を世に問うた。さらに21世紀に入ってからの『オリクスとクレイク』では、人類の滅亡が射程に入った未来社会が描かれている。

アトウッドの作品では、プロットが作品ごとに変化のある面白い展開をみせ、読者を驚かせたいという創作上の思いが強い。アトウッドの作品の人気は、この娯楽性と、テーマが時宜に適っていること、テーマを表すための技法が絶妙であることなどがあげられる。しかし、登場人物やその人間関係には冷たいものがある。

子ども時代のいじめのトラウマが原因であるかもしれないが、冷たい女性像はカナダ文学の女性像の典型でもある。作家自身も、この点に気がついていて、人間像とその関係性を発展させようと試みているので、それを跡づけて論じた。

アトウッドは、1960年代のカナダの文化的アイデンティティを模索する大きなうねりの中で、詩人として小説家として成長を遂げ、ローカルな場における問題、辺境と周縁におけるサバイバルをテーマにしなから、次第にグローバルな地球環境の悪化と人類のサバイバルについて関心を広げていった。カナダ人として自分たちの体験を確認しながら、未来への希望を示すという方向性が、人類のサバイバルの問題へと発展していったのである。このような創造的な展開の原動力になっているのは、アトウッドが若き日に受けた、ノースロップ・フライの薫育の賜物であろう。

想像力は芸術的な機能と同時に、社会的で実践的な機能も持っていると言った。それゆえに、文学者は批評や創作活動によって人々の想像力を陶冶し、読者の人生における希望やあるべき社会を構想する力を養うのである。

人類のサバイバルが喫緊の問題となっている現代において、このような想像力の可能性を最大に利用しながら、「マッドアダム三部作」や『負債と報い』など環境と文学をテーマにした作品を創造することによって、社会変革の途を探るアトウッドの姿勢は、ポストコロニアリズムとフェミニズムの作家を越えて、世界を牽引する文学的リーダーの姿を示している。

とくに、『負債と報い』は、批評、文学史、創作を駆使して、現代文明の危機に一石を投じようとする試みである。「人類の科学技術システムは、人が注文したいと思うものを何でも引き出せる碾き臼で、その機械の止め方を誰も知らない」という比喻で、現代の状況に対して明確なイメージを描いている。

しかしながら、科学技術という現代の碾き臼が挽き出すものによって、すべての人間が何らかの形で恩恵を被っている。そこから抜け出すためには、成長戦略や欲望などとは違ったコンセプトとアイデアが必要となってくる。環境保護に対する問題提起と、行動を起こさなければならない重要性は示されたが、その具体策ははまだ示されていない。アトウッドのさらなる思想的な展開が待たれている。